

# 佛性論と大般涅槃經

鹽田義遜

由來佛性の問題は勝鬘經、如來藏經等に見ゆる隱覆法身を如來藏と呼び、後に佛性と呼ぶに至つた如く、佛性と如來藏とは同義異語ともいへよう、發展の過程に於ては如來藏思想より佛性へと進展したのである。即ち堅憲の入大乘論に「大心衆生有如來藏」等に發したるに法界無差別論には勝鬘經の「空不空如來藏」、不增不減經の「衆生界法身、法身衆生界」、并に無上依經の菩提品の自性因緣等の十義に寄せて如來藏義を明かにし、終に寶性論の如來藏品第五には、「衆生如來藏、眞如無差別、乃至佛性遍衆生、諸煩惱不染」等と説き、煩惱所纏品第六には如來藏經の九故に依つて「打破煩惱模、顯發如來藏」と釋し、終に爲向義品第七には「問曰余修多羅中皆説一切空、此中何故説有眞如佛性この答偈に「遠離五種過、故説有二佛性」等説くに見る如く、寶性論には既に眞如佛性説を見るに至つたのである。かかる寶性論を更に詳説したのが世親の佛性論である。

佛性論は緣起、破執、顯體、辯相の四分より成るが、緣起分の最初に「問曰佛何因緣説二於佛性、答曰如來爲除三種過失（下劣、上慢、妄執、誹謗、我執）生五功德（正勤、恭敬、般若、闍那、大悲）故、説一切衆生悉有佛性、乃至佛性者即是人法二空所顯眞

佛性論と大般涅槃經（鹽田）

如」等と、寶性論に依つて佛性義を標し、次の破執分三品は初の破小乘執品は瑜伽論六七等に依り分別部を空佛性、毘曇薩婆多を修得佛性となし、次の破外道品は中論、後の破大乘見品は瑜伽論七五等に依て各執見を破し、後の顯體、辯相分は寶性論の僧寶、如來藏に依るが、顯體分の三因、三性、如來藏三品の中、應得、加行、圓滿の三因、三性の如きは、世親の攝論釋第七等にも見ゆる如く、初二品は世親の創造とも云はれて居る。第四辯相分の自體、相、明因、顯果、事能、總攝、分利、階位、遍照、無變異、無差別の十品は、全く無上依經の菩提品の十程義を、勝鬘、不增不減、如來藏、不可量（維摩）、法董、般若、解説等の諸經並に寶性論に依て詳説したものである。就中第二明因品は無上依經菩提品の三品七種の衆生中著有の無涅槃性、誹謗大乘の二種邪定聚を棄捨大乘の闍提障、著無中行無方便の外道我見の二種不定聚を謬執我見の外道障、行有方便の二種正定聚中、生死厭畏の二類を聲聞障、背利益他の一類を緣覺障の四障となし、菩薩を除いた是等の四類は、信樂大乘、分別涅槃、破空三昧、菩薩大悲の佛性清淨因たる無上法身に到達し得るが故に、此等四人を佛子と呼び因緣、依止、成就の四義に寄せてその佛性義を明にして居る、即ち

初言「因者有二、一佛性二信樂、此二法佛性是無爲信樂是有爲

信樂、約<sup>二</sup>性得佛性<sup>一</sup>爲<sup>三</sup>了因、能顯<sup>三</sup>了正因性<sup>一</sup>故、信樂約<sup>二</sup>加行爲<sup>三</sup>生因、能生<sup>三</sup>起衆行<sup>一</sup>故。二緣者謂般若波羅蜜、能生<sup>三</sup>菩薩身<sup>一</sup>、是無爲印德家緣故。三依止者破空定等、乃至四成就者菩薩大性利益他事無盡故、

等と説いて、無爲信樂は性得佛性で正因性、有爲信樂は修得佛性で了因性、或は加行生因とも説き、因の佛性信樂は闡提、緣の般若波羅蜜は外道、依止成就は聲聞緣覺の各清淨因即ち佛性と説くのである。若し事能品第四には勝鬘經の「若無<sup>一</sup>如來藏<sup>一</sup>者、不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>厭<sup>レ</sup>苦樂<sup>一</sup>」の文に依り、聲聞緣覺の二類は厭苦樂求の二心あるが故に、自利の爲に涅槃を捨てず、利他のために生死を捨てざる、觀樂觀苦の二觀に依る、所謂菩薩無住涅槃の願を以て二乘の佛性となし、先の明因品の因緣を闡提外道の佛性、今の無住涅槃の願を二乘の依止、成就の佛性となし、以て四障人は四因を具する故に佛子と呼ぶと説くが、佛性論の二空眞如佛性義である。

## 二

然るに佛性論には事能品の終に至つて、經中闡提に對し有性無性の別ありとなし、

經中說一闡提人墮<sup>二</sup>邪定聚<sup>一</sup>有三<sup>二</sup>程身<sup>一</sup>、一本性法身、二隨意身。佛日慧光照<sup>二</sup>此<sup>一</sup>二身、法身即眞如理、隨意身者即從<sup>二</sup>如理<sup>一</sup>起<sup>二</sup>佛光明<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>憍愨、闡提<sup>二</sup>二身者<sup>一</sup>一爲<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>法身得生<sup>一</sup>、二爲<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>加行得<sup>レ</sup>長修<sup>一</sup>善提行<sup>一</sup>故觀得成。復有<sup>二</sup>經說<sup>一</sup>闡提衆生決無<sup>二</sup>般涅槃性<sup>一</sup>。若爾<sup>二</sup>二經<sup>一</sup>便自相違、合<sup>二</sup>此<sup>一</sup>二說<sup>一</sup>一不<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>故不<sup>レ</sup>相違<sup>一</sup>。

等と説いて居るが、これに就て常盤博士は先の有性了義の二種闡提は、實性論に依つて無嚴性起品の説、後の無性不了の一類は、楞伽經の闡提は有性なる故に、涅槃經第九如來性品の誹謗大乘の一類を

指すとなし、涅槃經の成立を佛性論と同時或は以後（佛性の研究）と論じて居る。若し木村博士に依れば、佛性論は如來藏、大乘涅槃、楞伽經等に依つたのであるが、併し涅槃經の成立は幾多階段を経て整理せられたのであらう（大乘佛教思想史）と述べ、宇井博士は涅槃經は小乘涅槃經が、般若法等に依て次第に發達し世親以前の成立であるが、楞伽經は世親以後の成立（印度哲學史）等と説いて、楞伽經の成立は三者各別であるが、大涅槃經の成立は共に佛性論以前として居る。

翻つて曇無讖譯四十卷大涅槃經に就いて見るに、十三中初の壽命、金剛身、名字功德、如來性、大眾所問、現病の六品は、如來性品を中心として闡提不成佛説、後の徳王、師子吼、迦葉、陳如の四品は、師子吼を中心として闡提成佛説、中間の聖行、發行、嬰子行の三品は前後の媒介の如き説相である。これ先の木村博士の幾多の段階の意であらうが、更にこれを涅槃經諸本に就て見るに、法顯譯の大般涅槃經六卷は中天竺摩訶提國將來と傳へられ、讖譯四十卷の初分、壽命より大眾所問に至る五品と粗ぼ同文である。又智猛譯二十卷の泥洹も法顯譯同本と稱せられ、且つ讖譯四十卷中部の十卷五品の梵本は智猛の高昌傳來、現病品以後八品は當時敦煌將來といはれて居る。かかる内容よりすれば涅槃經は、先づ法顯譯に相等する初分が成立し、後に闡提成佛を設ける後分が成立し、後前後を合して大涅槃經となつたものと想像せられる。これ恰かも法華が前分の迹門分と後分の本門分とが、前後に成立して一經となつたのと同じ關係かと思はれる。

然らばかかる涅槃經の成立は何時かといふに、上述に依れば佛性論以前といふのが從來の説である。而して一經の内容は四十卷の前

分は如來性品を中心として、如來藏經等に依つて一切衆生悉有佛性と説くも除一闍提等と説いて闍提を排斥するも、然るに後分就中第廿七師子吼品第十一に至つては、佛性を第一義空、中道、十二因縁、一乘等と説き、又「有因有因々、有果有果々」とも、亦「亦色非色非々色、亦相非相非々相、亦一非一、非一非々一、希段有無盡因果」等と、佛性論に於ける二空所顯眞如以上に、積極的不空佛性義を見るのみならず、同品に御佛性の因に就て「因有二種、一者生因二者了因」とも、又生因を能生之顯、煩惱諸結、穀子等、六波羅蜜、信心等、了因を燈能了物、縁生父母、地水養、入正道等となし、更に「正因者如乳生酪、縁因者如煖釀」等とも亦、「正因者謂諸衆生、縁因者謂六波羅蜜、乃至縁因者即是了因、世尊譬如闍中先有諸物、爲欲見故以燈照了」と等と説く。就中正因を諸衆生等と説けるに依れば、佛性論の消極的ニ空所顯眞如に比して、遙かに積極的内容の發達を見るものである。且つ師子吼品に見ゆる佛性説は、先に掲げたる佛性論の明因品の、佛子の四義中初の因縁の二義を説いて因者有二、一佛性ニ信樂、此兩法佛性是無爲信樂（正因）、是有爲信樂（了因）、約性得佛性爲了因、能顯了正因性故。信樂約三加行爲生因、能生起衆行故。二縁者謂般若波羅蜜等と説ける文義に由來することは、涅槃經に見ゆる佛性の正了生縁の四因が、右の佛性論の釋に徴して明かである。

更に佛性論に於ける了不了二種闍提典據中、最初の法性法身、隨意身の二闍提説は、常盤博士の指摘せる如く、寶性論僧寶品の下の釋に依れば、華嚴性起品の「如來具足智慧在於身中而不見一（法性法身）、我當方便教彼衆生覺悟聖道」（隨意身）の意も解し得るが、又楞伽經一に

佛性論と大般涅槃經（鹽田）

一闍提有三種、一者捨一切善根及於無始衆生發願、乃至二者善薩本自願方便故、非不般涅槃一切衆生而般涅槃等と説ける、斷善大悲の二種闍提説にも合致するのである。又次の不了義無涅槃性の闍提の文に就て、常盤博士はこれ涅槃經前分の説を以てするが、併し單に前分のみでは一經の説として容受することは出来ない。然らば何經かといふに、これ佛性論の明因品に引用せる、無上依經菩提品の三種衆生の最初に

著有者復有三種、一者背涅槃道無涅槃性、不不求涅槃願衆生死、二者於我法中不生渴仰誹謗大乘、

等と説ける二種邪定聚の闍提障の文なることは明かである。故に佛性論に於ては二經を一往了了と會したる下に於て

故佛説若不信樂大乘一名一闍提、欲令捨離一闍提心故、説住闍提時決無解脫。若有衆生有自性清淨淨永不解脫者無有是處、故佛觀一切衆生有自性故、後時決得清淨法身、

等と説いて、一切衆生悉有佛性の故に無涅槃性の闍提も悉く作佛すと説いたのが佛性論である。同論にも佛性を二空所顯の眞如と説き三因品には應得因、明因品には佛性清淨因とも説くが、若し總攝品の七種轉依法身の第五拔除阿梨耶に依れば、梨耶の相分が無爲信樂の正因佛性、見分の有爲信樂が了因乃至加行生因で、これ三十頌に「不可知執受、如了常與觸」等と説けるもので、涅槃經に至つては正因を諸衆生、了因を燈能了物等と説くに至つたものである。以上に依て上掲の諸經中、楞伽經は恐らく佛性論以前の成立であり、大涅槃經も前分は佛性論以前であるが、この前分の闍提問題を佛性論の意に依て解決するために成立したのが大涅槃經の後分であらう。